

高梁市の市街地に住む高齢女性の暮らし (その2)

野邊 政雄

筆者は2000年10月から11月にかけて高梁市の市街地に住む高齢女性に聞き取り調査をおこなった。本稿では、収集した事例のうちから6つの事例を提示し、これを検討することによって、地方小都市の市街地に住む高齢女性がどのような暮らしをしているかを明らかにした。

Keywords : 高梁市, 市街地, 高齢女性, 高齢化

5 検 討

第1に、備中高梁駅の周辺に発達している市街地の生活環境が高齢者にとって良好であるということを目指したい。備中高梁駅周辺は平野となっており、高梁市の中心的な市街地である。この市街地は、高梁川に沿って南北に2.8キロ・メートル、幅は500メートルほどの狭い地域である。

さて、高齢者にとっての生活上の大きな問題は、買い物と病院への通院である。毎日の生活で買い物が必要なことは言うまでもないであろう。高齢者に特有の生活上の問題は、病院への通院である。外見では健康そうで、自由に動き回れる高齢者でも、体のどこかが悪く、定期的に病院に通院している人が多い。事例調査では、多くの高齢女性は高血圧で病院に通院していた。医者は2週間分の薬しか処方しないから、そうした高齢者は月に2回は病院に通っている。

備中高梁駅の周辺は商店街である。さらに、市街地の南端に広い駐車場を備えた郊外型の大型店（専門店のテナントやレストランの入った総合スーパーマーケット）があり、駅近くには24時間営業のコンビニが数店ある。このように多くの商店があるので、高齢者は家のまわりで買い物ができる。それから、備中高梁駅周辺の市街地には、多くの病院がある。（電話帳で調べたところ、13の病院と7つの歯科診療所があった。）だから、高齢女性は、自宅から数分も歩けば病院に行ける。商業サービス（医療施設と商業施設）が整備されているので、高齢者が歩け

れば、日常生活であまり困ることはない。事実、本稿で紹介したいずれの高齢女性も日常生活でべつに困っていることはないと答えていた。

第2に、備中高梁駅周辺の市街地に住む高齢女性には、友人が身近なところにいることである。提示した事例では、高齢女性の近隣者だけでなく友人も歩いてゆけるような近くに住んでいた。いずれの高齢女性も、備中高梁駅周辺の市街地の外に友人はいなかった。ましてや友人は高梁市外にはいなかった。

これは次のようなことからである。高梁市は周辺の農村部を合併して成立したので、市街地の外側には農村部が広がっている。備中高梁駅を中心とした市街地は、南北に端から端まで歩いて40分ほどである。この地域の中に、多くの商店や病院があり、寺院、市役所や福祉センターなどの行政機関もある。生活関連施設や行政・商業サービスがこの狭い地域に集まっているから、高齢女性はその中で日常生活を営み、あまりその外には出かけることはない。それに、大部分の高齢女性は運転免許証を取得しておらず、車の運転ができない。こうした理由から、高齢女性の生活空間はとても狭いのである。[事例1]のHさんは就業していたが、職場は近所にあった。

[事例2]のIと[事例5]のLさんはほとんど自宅で毎日をすごしていた。[事例1]のHさん、[事例3]のJさん、[事例4]のKさん、[事例6]のMさんは教室に通って習い事をしていたが、そうした教室は市街地の中で開かれていた。[事例3]のJさんと[事例4]のKさんは、近くに畑を

借りて野菜を栽培していた。このように、毎日の生活をほとんど備中高梁駅周辺の市街地の中で営んでいるので、近隣関係だけでなく友人関係もその狭い地域内で取り結ぶことになったのである。

第3に、高梁市の市街地と高原部に住む高齢女性のソーシャル・サポートの必要性を比較したい。前述のように、生活関連施設や行政・商業サービスが市街地では整備されているので、高齢女性は歩けるほど健康であれば自立して生活をおくれる。だから、日常生活では子供や近親者などからあまり援助を受けなくとも暮らしてゆける。

こうした状況は、高原部に暮らす高齢女性のそれとは大きく相違している。高原部には商店や病院はあまりないので、高原部の高齢女性は買い物や病院への通院などのために市街地に月に何回かは出かけて行かないといけない。また、手助けが農繁期の農作業に必要である。さて、高齢女性の多くは、運転免許証を持っていない。夫が健康で車を運転できれば、夫婦で自立して生活ができる。けれども、夫が亡くなったり、車を運転できなくなると、高齢女性は自立した生活をおくれなくなってしまう。そうすると、健康であったとしても、高原部で暮らしてゆけるのは、子供（夫婦）や近親者などに援助を仰げる高齢女性だけになってしまう。例えば、子供（夫婦）と同居する高齢女性や、子供に頻繁に来てもらえる高齢女性である。そうした高齢女性は、子供（夫婦）などに買い物や病院への送迎をしてもらったり、農作業を手伝ってもらうのである（野邊2000a；野邊2000b）。このように見てゆくと、高原部の高齢女性は、市街地の高齢女性よりも日常生活でソーシャル・サポートを必要としていることが分かる。

第4に、一人暮らしであるHさんのパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートを考察したい。高齢者にとって、同居家族に次いで別居する子供がサポート源として重要であるといわれている（前田1988；野口1991）。しかし、Jさんの一人息子は横浜市に住んでいたもので、日常生活において息子夫婦に助けってもらうことはできなかった。そのうえ、近親者も岡山県内にはいなかった。市街地の高齢女性は農村部の高齢女性よりもソーシャル・サポートを必要とはしていないことは前述の通りであるが、Hさんのように子供や近親者が身近なところにはいない高齢女性は、市街地でも少ない。彼女は子供や近親者が岡山県内にいないので、近所に住む友人といろいろと助け合いながら、暮らしていた。そうした援助は情緒的援助だけでなく病気になったときの身辺介護にも及ぶものであった。ただし、Hさんは健康であり、生活において自立していたから、実際には

身辺介護はほとんどしてもらってはいなかった。さらに、Hさん、その友人と友人の娘はしばしば自宅に相手を招いて、食事を一緒にしていた。その友人は50歳代であるので、だいたいHさんの娘の年代である。だから、あたかも娘が近所に住んでHさんの世話をやいたり、Hさんと交際をしているようであった。近所に住む人々もHさんにいろいろと気を配って、援助の手を差し伸べていた。さらに、Hさんが勤めている会社の社長の夫人は友人ほどHさんを助けてはいなかったけれど、職場だけでなく自宅をしばしば訪ねて世間話をしたりして、Hさんの生活に注意を払っていた。

さて、子供や近親者から援助を仰げない、高梁市の高原部に住む高齢女性の事例を本誌の第114号で紹介した（野邊2000b）。その高齢女性は近隣者との関係を強化し、そうした人々から支援を受けながら、日常生活をおくっていた。Hさんは、子供や近親者が近くに住んでおらず、そうした人々から援助を入手できないという点で、その高齢女性と同じような状況にあった。そうした状況に置かれた高齢女性は、子供（夫婦）に代わるきわめて親密な近隣関係や友人関係を作り上げて、そうした人々から援助を入手して、日々の生活をおくっているのだ。

Hさんが子供に代わる親密な友人関係を形成できたのは、高梁市が「土着型社会」（鈴木1986）であるからだろう。高齢者の多くは高梁市の同じ場所に何10年と長く住み続けているうえに、狭い地域で毎日の生活をおくっている。こうした生活の中から、気の合う人々と非常に親密な友人関係が生まれる。一人暮らしで、別居する子供（夫婦）も遠方に住んでいて、そうした子供（夫婦）から援助を仰ぎにくいとき、高齢女性は近隣者や友人との関係を強化して、そうした人々から援助を受けながら、日々の生活をおくっているのだ。

第5に、主観的幸福感を考察したい。表1は、事例調査をおこなった高齢女性の主観的幸福感と属性をまとめたものである。高梁市の高齢女性を対象におこなった標本調査によれば、高齢女性のモラル得点の平均は11.29（標準偏差, 3.62）、生活満足度の平均は75.09（標準偏差, 16.18）である。これらの平均と比較すると、Hさんのモラル得点と生活満足度はいずれも平均よりも高い。Iさんのモラル得点はきわめて低く、生活満足度は高い。Jさんのモラル得点は平均よりもやや高く、生活満足度は平均に近い。ただし、生活満足度は実際にはもっと高いと答えていたから、平均よりも高いと見なしうる。Kさんのモラル得点も生活満足度も平均に近い。Lさんのモラル得点は非常に低く、生活満

表1 主観的幸福感と属性

名 前	モラール	生活満足度 (1997-98年)	生活満足度 (2000年)	1997-98年 当時の健康度	収 入	家族形態	同居する子供 との関係	近隣・友人 関係数	習い事
H(事例1)	17点	100点	100点	健康	401-500万円	一人暮らし	—	3人	している
I(事例2)	5点	100点	100点	健康でない	100万円未満	一人暮らし	—	0人	していない
J(事例3)	13点	70点	70点	健康	501-600万円	夫婦のみ	—	4人	している
K(事例4)	12点	70点	80点	健康	201-300万円	夫婦のみ	—	6人	している
L(事例5)	6点	80点	80点	健康	100万円未満	長女夫婦と同居	良くない	3人	していない
M(事例6)	14点	95点	100点	健康	301-400万円	長男夫婦と同居	良好	2人	している

（注）Kさんは2000年に脳梗塞になった。

足度は平均に近い。Mさんのモラール得点と生活満足度は平均よりも高い。これら6人の間に生活満足度では大きな差がなかったから、モラール得点で主観的幸福感を判定したい。そうすると、IさんとLさんのモラール得点は低く、Kさんのそれは平均的であり、Hさん、Jさん、Lさんのそれは高いということになる。IさんとLさんのモラール得点が低い理由を探究することによって、主観的幸福感に影響を及ぼす要因を明らかにしたい。

Iさんは緑内障にかかり、ずっと寝込むほどではなかったが、足も弱くなっていた。そして、収入が少なかった。彼女には、親しい近隣者や友人はまったくいなかった。そのうえ、集団に加入して活動をしていなかったし、習い事もしていなかった。とても社会的に孤立した暮らしをしていたのは、健康を害していて貧困であったからと考えられる。

Lさんは収入が少なかったけれど、資産を持っていたから生活には困ってはいなかった。3人の友人がLさんにはいたけれど、Lさんは友人とはあまり頻繁に交際をしてはいなかった。Lさんは健康であり、貧困ではなかった。にもかかわらず、彼女が近隣者や友人とつき合っていなかったのは、これまでの生活歴のためであるようだ。これまで夫に頼りきって生きてきたから、社会関係を自力で築き上げてゆくスキルを習得できなかった。だから、夫と死別した後、人々と頻繁につき合いはしていなかったと考えられる。

IさんとLさんは社会的に孤立した暮らしをしており、モラール得点が低かったのに対し、それ以外の高齢女性は近隣者や友人と親しくつき合い、モラール得点が平均くらいか、高かった。したがって、IさんとLさんのモラール得点が低かったのは、社会的に孤立した暮らしをしていたことが一因であると推論できる。さて、MさんとLさんは子供夫婦と同居していた。Mさんは同居する子供夫婦と良好な関係にあったのに対し、Lさんは同居する娘夫婦とは

食事など必要最小限のつき合いしかしていなかった。とすると、Lさんが同居する子供夫婦と疎遠な関係にあったことも、モラール得点を低めていたと考えられる。同居する子供（夫婦）、近隣者、友人とつき合ったり、集団で活動することで、高齢女性は欲求を充足し、生きがいを感じることができる。だから、そうした高齢女性のモラール得点は高いのだ。

JさんとKさんは市街地の中にある畑を借りて、自家用に野菜作りをしていた。彼女たちはそうした作業ができるほど健康であることも見落とすことができない。Jさんは農作業を楽しんでいるとも言っていた。そして、彼女たちのモラール得点は平均かそれよりも高かった。このことから、農作業をすることが、彼女たちのモラールを平均かそれ以上に高めていたと推論できる。これまでの研究では、他の人々と一緒におこなう社会的活動がモラールを高めるといことがしばしば指摘され、社会関係の量でそれを測定して、モラールとの関連が探究されてきた（例えば、古谷野他1995）。これに対し、JさんやKさんがやっていた農作業は一人でおこなう活動である。とすると、社会的活動だけでなく、自らが生きがいとする一人でする活動も、高齢女性のモラールと高めていると推論できる（木下他1996：p.105）。高齢者の主観的幸福感の研究では、社会関係の多寡で測定されるような社会的活動だけでなく、生きがいとしている一人でおこなう活動があるかどうかといったことにも今後注目すべきだろう。以上のことを要約すると、健康度、収入、一人あるいは他の人々とおこなう生きがいとする活動の有無が、直接的にあるいは間接的に高齢女性の主観的幸福感に影響を及ぼしているということになる。

高齢女性が生きがいとする活動をおこなうことが高い主観的幸福感を抱くことに繋がるということを明らかにした。さて、Iさんはモラール得点は5点と低かったが、生活満足度は100点であった。そして、生活満足度を満点と答えたのは、現在はしゅう

となどに気がねをせずに暮らせるからであった。とすると、高齢女性は生きがいとする活動をおこなっていることによって主観的幸福感が高いと感じるだけでなく、過去の生活との比較によっても主観的幸福感が高いと感じているのである。このことは、生きがいとなる活動をおこなっていることによって主観的幸福感が高くなるというのが多くの高齢女性にあてはまるメカニズムであるとしても、高齢女性が主観的幸福感を高いと感じるメカニズムが幾通りもあることを示している（木下他1996：p.108-109）。

第6に、高梁市の市街地に住み続ける理由を検討したい。Iさんは市街地にしたいと住み続けたいとは言っていない。子供に迷惑をかけたくないという気がねから、神戸市に住む長男夫婦と同居することを望まなかった。そこで、これまで暮らしてきた市街地に住んでいた。Lさんも市街地にぜひ住み続けたいとは思っておらず、住み慣れているということでなんとなくそこに住んでいるようであった。IさんとLさん以外の高齢女性は、市街地にずっと住み続けることを希望していた。そうした4人の高齢女性はすべて市街地の中に知り合いがいることをその理由としてあげていた。つまり、市街地の中でこれまでに築き上げた社会関係を捨てたくないということから、高齢女性はそこに住み続けていた。これは、社会関係が高齢女性をある場所につなぎ止めるものとして重要であることを示唆している。

市街地に住む高齢女性のそうした理由を高原部に住む高齢女性の理由と比較したい。子供（夫婦）と同居するために、高齢女性が高原部を離れて都市に移り住むと、若いときからしてきた農業ができなくなってしまう。慣れ親しんだ仕事を続けるために、高原部の高齢女性の多くはそこに住み続けていた（野邊2000a；野邊2000b）。同じ高梁市内に暮らす高齢女性でも、市街地に住み続ける理由と高原部に住み続ける理由とは異なっているのだ。

6 要 約

備中高梁駅の周辺の市街地に住む高齢女性に聞き取り調査をおこなった。6人の高齢女性の事例を分析することによって、次の6点を明らかにした。

- (1) 生活関連施設や行政・商業サービスが整備されているので、市街地の生活環境が高齢女性にとって良好といえる。
- (2) 生活関連施設や行政・商業サービスが市街地の中に集まっており、高齢女性の多くは運転免許証を持っていないので、高齢女性は市街地の中で日常生活を営み、あまりその外には出かけることはない。だから、高齢女性は大部分の社会関係をそ

の中で組織している。

- (3) 高原部の高齢女性は、市街地の高齢女性よりも日常生活でソーシャル・サポートを必要としている。
- (4) 一人暮らしで、別居する子供（夫婦）が遠方に住んでいる高齢女性も市街地にはいる。そうした高齢女性は近隣者や友人との関係を強化して、そうした人々から援助を受けながら、日々の生活をおくっていた。
- (5) 健康度、収入、生きがいとする活動の有無が、直接的にあるいは間接的に高齢女性の主観的幸福感に影響を及ぼしている。
- (6) 市街地に居住し続けることを希望する高齢女性は、そこで組織している社会関係を捨てたくないということからそうしていた。

（引用文献）

- 木下栄二・高木恒一・浅川達人・安藤 究. 1996. 「大都市高齢者の主観的幸福感——男性初期高齢者へのヒヤリングデータより——」, 『都市問題』, 第87巻第3号, 95-111頁.
- 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・横山博子・松田智子. 1995. 「都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」, 『老年社会科学』, 第16巻第2号, 115-23頁.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男. 1989. 「PGCモラル・スケールの構造——最近の改訂作業がもたらしたもの——」, 『社会老年学』, 29号, 64-74頁.
- 前田尚子. 1988. 「老年期の友人関係：別居子関係との比較検討」, 『社会老年学』, 28号, 58-70頁.
- 野邊政雄. 1999. 「『高梁市高齢女性のパーソナル・ネットワークと主観的幸福感調査』の基礎分析」, 『岡山大学教育学部研究集録』, 112号, 57-78頁.
- 野邊政雄. 2000a. 「高梁市の高原部に住む高齢女性の暮らし」, 『岡山大学教育学部研究集録』, 113号, 69-85頁.
- 野邊政雄. 2000b. 「高梁市の高原部に住む一人暮らしの高齢女性の生活」, 『岡山大学教育学部研究集録』, 114号, 47-57頁.
- 野口裕二. 1991. 「高齢者のソーシャル・サポート：その概念と測定」, 『社会老年学』, 34号, 37-48頁.
- 鈴木広. 1986. 「生活構造」, 鈴木広著『都市化の研究』恒星社厚生閣, 172-189頁.

【付論】高梁市落合町阿部に住む高齢女性の事例

1 地区の状況

山々が成羽川に迫ってそびえ立っているが、川に沿って狭い平地が続いている。国道180号線は、その平地の中を走るように備中高梁駅から成羽町に続いている。その道路に沿った地域が、高梁市落合町阿部である。1970年ころは、そのあたりには水田が広がっていた。高梁市よりも県北にある辺鄙な町村（川上町、成羽町、備中町など）では過疎化が進行し、生活が不便となっている。そうした町村に住む高校を卒業したての若い人々は、生活の便利さを求めて落合町阿部に移り住んできた。また、備中町にダムが建設されたので、立ち退きのためそこに移り住んできた人もいる。こうして、だんだんと住宅や商店が建ち並ぶようになってきた。工業団地が落合町阿部に1980年ころ建設された。

現在では、成羽川に沿った平野部と緩斜面に、市街地が3キロ・メートルほど細長く発達している。東端は、備中高梁駅の周辺に発達した市街地と繋がっている。商店が国道180号線に沿って立ち並び、郊外型の大型店もある。国道に沿った商店の背後に多くの住宅が建っている。そして、畑が住宅地の中に点在している。国道180号線に沿って備中高梁駅と成羽町の市街地を結ぶバスは1日に25往復あり、交通の便はよい。だから、ここからは備中高梁駅にも成羽町の市街地にも行きやすい。病院は落合町阿部には2つしかないけれども、交通の便がよいためにそうした市街地にある病院へ通院しやすい。高梁市役所落合出張所兼落合勤労福祉会館が国道の並びにある。落合町阿部の住民の一部は工業団地にある工場で働いているが、倉敷市内や（倉敷市の）水島工業地帯に通勤している住民もいる。落合町阿部で生まれ育った多くの子供たちはそこに留まらずに、南にある岡山市や倉敷市などに出て住んでいる。だから、昔と比べると、高齢者が増えているという。

筆者は2000年11月に落合町阿部の高齢女性を訪問し、この事例調査をおこなった。

2 事例の提示

〔事例〕夫婦のみで暮らす高齢女性の事例

① 居住地の状況

Nさんは高梁市落合町阿部に住む75歳の女性である。夫婦だけで暮らしている。夫は78歳である。国道180号線は備中高梁駅から成羽町に走っているが、そのちょうど中間あたりのところから坂を50メートルほど登ったところに、Nさんの家はある。あたりは住宅地であるが、ところどころに畑がある。

160軒がNさんの住む地区にはある。その地区で

は、東と西に2つの町内会が組織されている。Nさんの所属する町内会には、65軒がある。町内会は7班に分かれており、Nさんの班は15軒からなっている。町内会では、ゴミ・ステーションの管理や清掃、道普請、舗装道の脇の草刈り、氏神さまの祭り（正月の祭り、夏祭り、秋祭り）をやっている。この町内会では、葬式は業者に頼まない。死者の出た家は市役所から祭壇を借りて、町内会の人たちに手伝ってもらいながら、葬式をおこなっている。町内会の総会は年に2回ある。長男が1985年に岡山市で結婚式を挙げたときは、町内会の人を招いた。

② これまでの暮らし

Nさんは、岡山県成羽町で生まれた。旧制の高等女学校を卒業して、病院で看護婦として勤めた。1948年に結婚をした。夫は遠い親戚にあたり、本人どうしが結婚を決めた。夫は、電気係として企業に勤めていた。Nさんは結婚後は看護婦の仕事をやめ、備中町にある夫の実家で農業をするようになった。夫との間に、息子1人と娘2人が生まれた。

夫の職場への通勤に便利のように、1969年に落合町阿部の現在の場所に引っ越してきた。その当時は、Nさんが住む地区には30軒しかなかったが、現在は160軒に増えた。また、当時はその地区には商店は2つしかなかったが、現在では国道180号線に沿って多くの商店が立ち並んでいる。現在の場所に引っ越してからは、Nさん夫婦は近くに畑を借り自家用に農業をしている。すべての子供は他県の大学に進学するために家を出た。それ以来、子供たちはずっと外で暮らしている。夫は長男なので、備中町にいた夫の両親を1970年に引き取って、同居を始めた。子供たちが大学に入学して学費がかかるようになったので、Nさんは1967年から再び看護婦として病院で働き始めた。夫の母親は1972年に脳溢血で寝たきりになり、1985年に亡くなった。夫の父親は1975年にくも膜下出血でやはり寝たきりになり、1978年に死亡した。夫は1977年に退職をしたが、すぐに近くの病院に宿直として採用され、1990年まで働いた。Nさんは1989年に脳溢血になって、目の焦点が合いにくくなった。それまでは習字を習っていたが、病気になるからはやめた。しかし、農作業はその後も続けている。

③ 現在の暮らし

Nさんは夫婦だけで暮らしている。Nさんは近ごろ体力が衰えたが、農業はできる。夫はとても健康である。Nさんは車の運転はしないけれど、夫が今でも運転するので、Nさん夫婦は自由に出かけられる。夫の運転で、Nさんは総社市や倉敷市によく出かけて行く。

毎日の買い物は家の近くにある商店でしている。落合町阿部に広い駐車場を備えた郊外型の大型店がある。その大型店は、Nさんの家から1キロ・メートルほど離れている。Nさんはときどきそこに歩いて買い物に出かける。近くにある畑を90アール借りて自家用に野菜を栽培している。毎日3時間ほど農作業をしているが、最近は体力が落ちて能率が上がらなくなった。

Nさんは高血圧で、とくに寒い日には高くなる。また、コレステロール値が高い。そのため、2週間に1度、夫に車を運転してもらって成羽町にある病院に通院している。生活で特別に困っていることはない。

④ パーソナル・ネットワーク

Nさんのパーソナル・ネットワークは図7のよう

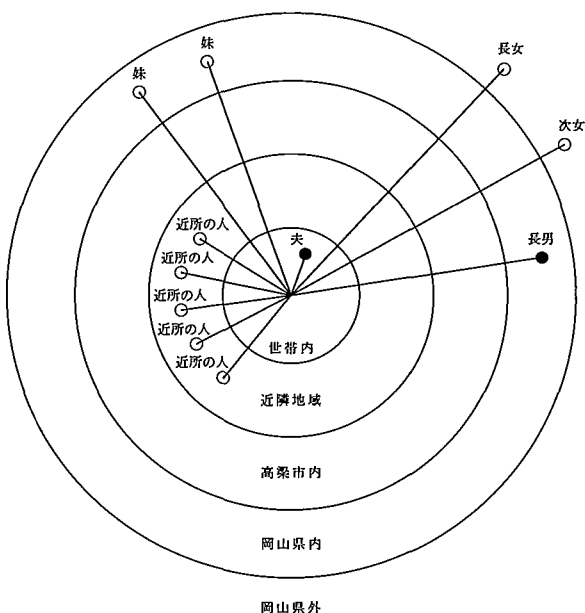


図7 Nさんのパーソナル・ネットワーク

注：黒丸は男性を示し、白丸は女性を示す。

である。長男夫婦は岡山市に住んでいる。孫を連れて、正月、お盆、お彼岸、5月の連休に帰ってくる。そうしたときに、近況や孫の将来のことなどを話し合う。電話は月に2・3回し合っている。長男の嫁は近くの岡山県川上町出身で、実家に孫を連れて帰るときに立ち寄るので、長男よりも頻繁にここを訪ねてくる。長女は三重県に住んでいる。お盆に帰ってくるくらいであり、電話も年に数回しあうくらいである。次女は千葉県に住んでいる。正月、お盆、お彼岸に帰ってくる。電話は月に1回ほどある。子供たちが正月、お盆、お彼岸に帰ってきたときは、この家の守護神のお祓いを皆でおこなう。

Nさんの妹が隣の成羽町に住んでいる。洋裁をしていて、Nさんの服を直してくれる。Nさんは野菜の苗を作って持って行ってあげたりする。夫は車を運転できるので、妹のところにはすぐに行ける。だから、Nさんは子供たちよりも妹と頻繁につき合っているし、妹を最も頼りにしている。もう1人の妹も成羽町に住んでおり、相談ごとをしたりする。

家の南隣には、50歳代半ばの夫婦が住んでいる。妻は看護婦をしている。その女性とはしばしば話をしたり、家を空けるときにその女性に留守の時の家のことを頼む。坂の上には、Nさんと同じ年代の親しい女性が1人住んでいる。自分で栽培した野菜をその女性のところに持って行って、話をよくしてくれる。ただし、その女性は内職をしていて忙しいので、迷惑にならないようにしている。この2人の他に、親しくつき合っている同年代の女性が近所に3人いる。Nさんが畑仕事をしているときに、出歩いているそうした女性によく会って、立ち話をする。そうした女性に相談をしたり、ちょっとしたことを助けている。近所に住むこうした女性たちとは週に1回は会うが、電話で話したりすることはない。

Nさんは老人クラブに加入しており、空き缶拾い、雑草取り、スポーツ大会、年2回の日帰り旅行などに参加した。愛育委員会が開いている健康教室にここ10年ほど参加し、介護の仕方を習った。栄養教室や老人大学に出席して、話を聞く。こうした会合のときに、同年代の参加者と雑談をよくする。

⑤ 主観的幸福感

Nさん夫婦は自家用の農業をしている。Nさんはそれを楽しみにしており、次のように言っていた。「芽が出て、花が咲いて、実がなるのを見るのが楽しい。植物はものを言わないが、水がほしいとかは見れば分かる。草取りをしないとイケないし、手入れが次々とある。用事がないときはほとんど畑に行っており、退屈ということはない。」

1998年には、モラール得点は8点で、生活満足度は80点であった。その当時は、Nさんはまだ体力があってやりたいことができ、行きたいところに自由に行けたから、生活満足度は80点と答えた。ところが、現在では体力がずっと落ちてそうしたことができないから、生活満足度は今は70点である。でも、自分のことを自分でできるので幸せである。

⑥ 将来について

Nさん夫婦の長男は岡山市に住んでおり、ここに帰って住む気はないので、この家はいらないと言っている。Nさん夫婦が長男夫婦と同居するために岡山市に移り住んでも、そこには知り合いがいない。落合町阿部には約30年間住み、知り合いがいるので、

そこに将来も住み続けたい。また、Nさん夫婦が岡山市に住むようになるとやることがなくなってしまいが、ここならば農業ができる。こうした理由で、Nさん夫婦は落合町阿部に住んでいる。長男の嫁は田舎（岡山県川上町）出身なので、Nさん夫婦にはやさしく、気をつかってくれる。長男夫婦はNさん夫婦を見捨てたりはしないだろうが、Nさん夫婦は体が動かなくなるまでは自分たちだけでここでできるだけ頑張ろうと思っている。子供たちには自分たちのことは心配しなくていいと言っている。

3 検 討

第1に、生活環境を考察したい。近年、市街地化が落合町阿部では著しい。そこでは、生活関連施設

や行政・商業サービスが備中高梁駅の周辺の市街地と同じように整備されているので、市街地の生活環境が高齢女性にとって良好といえる。だから、Nさんは日常生活で困ってはいなかった。

第2に、Nさんが落合町阿部に居住し続ける理由を検討したい。備中高梁駅の周辺に広がる市街地に住む高齢女性の場合と同じように、Nさんは落合町阿部で築き上げた社会関係を失いたくないということから、そこにずっと住み続けることを望んでいた。

〔謝辞〕

聞き取り調査に応じていただいた、高梁市の高齢女性に感謝いたします。